

三沢市立三沢病院での小児科実習を終えて

弘前大学医学部医学科4年 関島大輝

「痛くないよと嘘をつくのではなく、痛いよと伝えた上で、終わった後に「痛かったね、よくがんばったね」と労いの言葉をかけよう」

私が初めて小児科の実習をさせていただいて一番初めに感じたのは、小児はよく泣くということでした。注射をしたら泣くとは思っていましたが、それだけでなく顔の周りを診察したら泣きますし、もっと言うと入室時から泣いている子や、扉が開くと華麗にバックしていく子も多くみられました。そんな様子に面食らっている私に先生は上記のような声をかけてくださいました。上記はほんの一部でしたが、小児を大切にしたいという先生方の心遣いが診察の至るところにあふれていました。泣いていた子がシールを見て目を輝かせて帰っていく姿を見かけましたし、先生にお礼の絵を描く子も見かけました。実習では座学では全く学んでこなかった、子供たちとの関わり方が勉強になりました。もちろん関わり方のみではなく、知識としてもとてもたくさんの学びを得ました。「先ほどの〇〇は△△を見ていたのですか？」と質問をすると、「よく見ることができているね」と褒めてくださったあとに「△△も大事だけど、□□や××や◎◎も見ているよ」と、一瞬の間あらゆることを把握しているのに驚きました。



先生方はうまく自分の症状を言い表せない子供たちに、直観も大事にしてらっしゃいました。五感を活用して、心音や呼吸音、肌の質感、視覚的に元気かどうか、とても注意して診察していました。検査などの数値も重要ですが、子供たちひとりひとりを注意して診ることの大切さを感じました。

他にも先生方の知識の幅広さを感じる場面は多くありました。感染症、花粉症はもちろん、お腹が痛い、頭が痛い、皮膚が赤くなっている、などのいろんな悩みが上がり、保護者の方々はそれぞれ心配そうな顔で病院にいらっしゃいます。それらの疑問に適切にアドバイスをし、保護者の方がほっとする顔や、雑談によって笑顔になる様子から、疾患を直すだけでなく家族の悩みにも寄り添うことのできる小児科医がとても魅力的であると感じました。今後も実習で教えていただいたことを思い出し、振り返りながら学習を続けていきたいと思います。

末筆ながら、貴重な時間を割いて丁寧なご指導を頂いた小児科の先生方、たくさんのお心遣いをいただいた三沢病院の職員の皆様方に厚く感謝申し上げます。

実習期間：2026.2.24~2026.3.6